

ペンテコステ：「スーパーグローバル宗教」の誕生

加 納 和 寛

イエス・キリストは十字架で処刑された後、3日目に復活しましたが、復活から40日後に天に昇り、あとに残された弟子たちは新たなコミュニティを形成しつつありました。そのまま何事もなければ、このコミュニティはユダヤ教の分派の一つとして、ほどなく歴史上から消えてしまふかもしれません。しかしイエス・キリストの昇天から10日後、つまり復活から50日後（「ペンテコステ」はギリシア語の「50番目の」を意味する語に由来します）に、集まっていた弟子たちに「炎のような舌」の「聖霊」が天から降り注ぎました。すると弟子たちは、それまで学習したことがないはずのさまざまな言語をしゃべり出し、外に出ていろいろな国の人々にイエス・キリストのことを語ったのです。この出来事を記念するのが「ペンテコステ」です。

この出来事はキリスト教にとって重要な意味があります。というのは、この時からキリスト教は「自分から外へ出かけていって、相手にわかる形式でこちらから話しかける」宗教になったのです。それは宗教として当たり前では？と思うかもしれません。しかし宗教に限らず、世の中のさまざまな会社、団体、サークルなどを観察してみてください。「わたしたちの良さがわかる人だけ向こうから来てくれればいい。こちらから出かけていって宣伝する必要はない」という態度のグループはけっこう多いものです。

しかしキリスト教は違います。ペンテコステの日以来、こちらから出かけていき、相手に通じる言葉で話しかけるのがキリスト教の基本姿勢です。関西学院もそのキリスト教の基本姿勢から生まれたものの一つです。創立者のW.R.ランバス先生がわざわざ日本に来てくださらなければ、聖書の舞台である中東からも、ランバス先生の故国アメリカからも遠く離れた東洋の島に、キリスト教の学校が設立されることはなかったのです。

その意味でキリスト教は最初から、世界へ出かけていくのが当たり前の「スーパーグローバル宗教」だったのです。あなたが今すでに、世界の人と話したい、世界に出て行きたいという燃えるような情熱を持っているとしたら、それはあの2000年前のペンテコステの日に降り注いだ「聖霊」が、あなたを導いているのかもしれません。

(神学部助教)